

兵庫県川西市の島本幸昭さん(71)のもとに今年七月、かつての同僚教師から連絡があった。「育成所で体験を学校で話してもらえませんか」。島本さんは固辞した。「申し訳ないが、お断りさせていただきます」

広島県五日市町(現広島市佐伯区)にあった広島戦災児育成所。そこで暮らした島本さんたち孤児は、多くが黙して語らない。家族にさえ話さない人もいる。「ふさがった心の傷を再び開くのはつらい」。自分と仲間たちの心境を、島本さんはそう説明する。

講演依頼には伏線があった。敗戦と被爆から半世紀の節目だった一九九五年、島本さんは「原爆の悲惨さを自分の娘たちの世代にも伝えねば」と思った。育成

成所での暮らしや平和の願

絆むすんで

いをまとめ、「轍」と題して私費出版し、百二十部を育成所仲間や勤めていた学校に配った。同僚教師たちは島本さんの境遇を初めて知った。

でも、体験を文章にできても、人前で話すのはしんどい。

両親と妹を失う
「怖いんですよ、子ども

言い忘れたせりふ



育成所関係者が集まった会合のビデオを懐かしそうに眺める島本さん

の前で話すのが。真剣に聞 いてくれないと、自分の人生を踏みじられた気がして

心の傷半生記に込める

講演は断り続ける。その代わり、新聞などマスコミの取材を受けることが、今

自分の伝承活動だと島本さんは考える。「あの日」を境に流転の人生は始まった。広島県北の板木村(現三次市三和町)の寺に学童疎開中、原爆は

広島にいた両親と妹を奪った。当時九歳だった島本さんは三人の遺骨を納めた箱を首にかけた。「あの重みは決して忘れない」

広島や呉を転々

その育成所には「家族のようなぬくもりがあった」。親類宅に引き取られ、猛勉強し、あこがれの広島高等師範付属小(現広島大付属小)への編入を果たした。

だが大家族の親類の経済的事情もあって一年半後、育成所の門をくぐった。「轍」に入所当初の思い

を一つづつしている。高師付属小の同級生が育成所に面会

「民間に就職しようにも履歴書の家族欄が大事だった時代。教員しか道がなかった」。卒業後、大阪市内の小、中学校で三十七年間の教員生活。「平和教育の授業で、何度か自分の体験を話そうかと思った。だが、勇気がなかった」。そんな自責の念に背を押され、退職前年の「轍」出版につながった。

あとがきにこう記している。「(人生)フィナーレの舞台の袖で、言い忘れたせりふをひと言残して去らん」

(下久保聖司)